

## 藝術觀

現はれるまゝに任して、なぜ現るゝかの因に溯らず、さうなるかの結果に顧慮せず、唯その現れのありのまゝに隨順する、是か我等の信の立ち場である。それは現れずには居られぬ威力を以て、更に夫を現さずには居られぬ壓迫緊張なる。その表現を藝術といふのが我等の立ち場である。

現るゝまゝの現實の威力、動亂の壓迫に隨順するまゝ、そこに全現實の融合滲透を感じる。是は抽象的觀照的統一でなくして、そこに感ずる具體的經驗的統一である。即ち現實の無極化である。此故に我等の表現は、高古的、原始的、創造的源頭に感ずる緊張の情熱を隨順の悲痛の高調であつて、分化の枝末岐路に感ずる矛盾、哀傷、靜止、逸樂、觀照でない。

自己に局分する動亂は頽廢であつて隨順でない、夫は唯暴露の悲哀に腐蝕するのである。全現實をそこに反映せしむるまゝ無極の没入不斷の緊張なる。超絶は個的死滅である。こ

ゝに現實の開展に順するが故の表現は絶滅する。

悲喜交錯する現實の波動は自然のリズムである。夫は全現實に滲透する緊張に従つて高まる。表現の威力はこの内に高まる緊張によつて形式、技巧のおのづからなる純化なる。

生は不可抗自然の威力のあらはれである。善悪は現れた上に於ての按排である。此故に生の表現たる藝術は無論超善悪である。然しながら夫が全現實に融合滲透するまゝに於て第一善である。夫は目的でなく結果である。

現實隨順の信を觸覚するまゝ藝術はその客觀的内容の表現である。その表現によつて生は無極に開展するが、内なる信によつて統一され、こゝに自我は自然人生一切の攝取の中心として渾一的生命の流動に没入し融合する。自分の味ふ藝術の意義は今茲に極まつて居る。

## 藝術的表現の生命と「日本」隨順

こゝに於ける藝術的表現は特殊の技巧的修練を要せざる意義に於て民衆藝術である。我が民

族に特有なる詩的表現形式たる和歌俳句は、我等をして悉く藝術的表現者たらしめ得る民衆的藝術である。夫故に皆受虚無之身無極之體の禮讃たらしめねばならぬ。痛苦の生に信順する人生的宗教の禮讃たらしめねばならぬ。

情意的動亂は不可斷の全開展にのぞましめらるゝとき、そのまゝに意義あらしめらるゝ、そのまゝに客觀的價値をたもたしめらるゝ。その表現としての連作和歌は全綜合によつて感激を統一する。そこに生のリズムはさながらにあらはるゝ。連作和歌の表現動機は現實隨順の信に相應する。更にそは一面に於て人生の動亂の反極面の内容としての悠久の自然に面接せしめる。そこに自然はたゞそのまゝのかたちをあらはす、うちなる單純化の感激によつてその一面をこらへるこき複雑なる全面的背景が暗示さるゝ。純自然詩としての俳句の表現の眞實境はこゝにあらう。

民族的精神の自覺は、日本人としての「人」たる我等の生のまことの自覺である。生の脉絡不可斷の開展の「時」を味はしむるからである。親鸞聖人の「時」に於てみこめられた「人等は淨土の正機なり」云ふ「人等」の内容は今の「時」に於てそれは民族的人である。民族的人の自覺に

よつての生の統一的内容が今聖人の信を具現するのである。我等の信順の綜攝としてのみ名が「日本」であることは、英國人に取つて「英國」、獨逸人に取つて「獨逸」であることである。夫故に我等に取つて「日本」のみ名は全人類の信順を全内容として綜攝するのである。

主觀的冥想の喜悅は實開展を離るゝが故に普遍的生命といふやうの形なき全體としての故にうちに味ふべきを、かたちあるものにして容易く誤りみこめしむる。そこに局分の安定に凝固せしめらるゝを覺らずして一瞬の快き魔酔にさそはるゝ。その超脱感は、無邊の生死海をつくさむとする全開展への信順をたち切る。然し誠に一瞬の魔酔境に過ぎぬからして、無限の追求的意志力はうちに醒めくすぶつて至極善の個的完成をめあてこするこころの智的按排の動搖に悩まされて行く。

生のさながらは客觀的全綜合の隨順に充實して味はしめらるゝ。罪惡深重の凡夫といふこころを實生活の情意的動亂に考へ極めてそれを人類の實全開展の上に綜合し、その活動全體を「日本」のみ名によつてあらはすことは、我等を至極善の個的完成の智的按排から解放して無極の綜合的意志のうちにめざめしむる。「み心に叶はしめむ」こする目當ての計ひをすて、「一つ事を

いつもめづらしく「聞く無限の追求的意志力、そのまゝの客観化たる藝術的表現の感激の根もこは「日本」隨順に極まるを信ずる。

## 民衆藝術と連作和歌

民衆藝術といふことは譯の分らぬことだ、こいへば最もよく民衆藝術といふことについての理解を極めたことにならう。

藝術の鑑賞創作を誰もが出来る藝術、従つて誰もが藝術家であり得る藝術的表現、即ちそこに誰もが生の悠久感を味ひ得るところの藝術的表現、更に日本人として誰も鑑賞し創作し得る藝術的表現を限定して來て、さういふものを希求することは意義があらう。

藝術はこにかく技巧を要する。鑑賞と創作とを誰も出来るものとするれば、そこには一般教化の根柢を豫想する。繪畫、彫刻、音楽等はそれを創作するものによつて、技巧について特殊の訓練を要する。それ故に誰もが鑑賞し得るにしても創作することは出来ぬ。

國語教育は一般的であるからして言葉の藝術は、鑑賞と創作とを一致せしめ得る藝術的表現をこみこめよう。

然しその形式の方面より見て、劇、小説の如きには技巧の特別の修練を要しよう。こゝに俳句短歌が技巧の修練を最小限度に簡單になし得るものゝ先づ見られよう。

更にそのうちについて特に連作和歌の形式に於ての短歌は極限の程度に技巧の修練を簡單に爲し得るものゝ見らるゝ。

連作和歌に於ては一首に完成の價値をみこめぬ、また一人に完成の價値をみこめぬ。同時代に於ける我ら、また我らにつぐ同胞の生の表現として祖國無窮の生をこもにしてその無究極の全體を連續せしめてそこに綜合的價値をみこめむとする、こ先づいはう。

その重んずるところは我らの國民的生活の經驗である。「名もなき民」としての國民的同朋感に表現衝動の根據を置くのである。そこに個人的動亂の痛苦を團體的生活の悠久感に總攝するのである。

かう考へて念佛稱名の宗教的行法と聯關せしめられて來る。念佛稱名は悲苦愛憎のあるまゝ、

の叫びを總攝し淨化するところの生の表現であつた。味はるゝ。いはゞ一つの合ひ言葉である。「なむあみだぶつ」といふ言葉はわれらの祖先の無量の痛苦の表現として今もなつかしきひびきを我らに傳へる。

それは與へられたる表現の鑑賞であるともいひ得よう。それを創作して實現するところが今我らの連作和歌であるといひ得よう。

それはいふならば宗教的行法からして藝術的創作への開展である。また宗教的信念の表現形式の開展であるとも味ひ得よう。

短歌俳句は詩の發達を妨げるといふやうの論を聞いたこともあるが、それは専門詩人の藝術的藝術觀に過ぎぬ。粗雑に反抗しよう。それからしてまた短歌について一首の完成的價值をみこめむとする専門歌人的態度には同様の理由を以て反抗しよう。苟くも藝術といふならばこいふやうの意味で一首に完成の價值をみこめむとする短歌藝術觀は我らの連作和歌に對する宗教的行法觀からは拒否されるべきである。

くりかへしていはゞ連作和歌の表現衝動は國民的生活の經驗内容である。その經驗内容から

こゝには生に密着する論理的節奏になつて自然に發露するでもいほう。

そこになんではあはす國民的同朋感、內的平等の歡喜は我らの無別道にたもつこゝには即ち國語に對する愛着を増上せしむる。

かういへば民衆藝術といふこゝは譯の分らぬこゝだ。こゝが、それについての理解を極めたものだとする判斷に一面の内容を與へ得た。今考へてゐる。

『新潮』に於ての三井氏の「民衆藝術の根本問題」といふ一文はこの問題についての根本的批判だ。僕はよましめられた。

## 良寛の歌

相馬御風氏は良寛の見地を推獎しつゝ、「世を救はうとてゐた彼は、一轉してたゞひびこへに自分一個の救ひを求めた彼になつた。自分一個の救ひ——それが同時に萬人の救ひである。信する彼になつた」といつて良寛の中古的隱遁生活の瞑想的情趣に肯定的價值をみこめてゐる。

自分一個の救ひを求めるといふのは、われらの見地から見れば發願の境地である。聖道門的發菩提心の境界である。「道德の深遠の如きは我徒の窺ふ所にあらず」といふやうの人格は、豎超的律法主義の個的完成である。

一切の否定のさん底から、彼の前に始めて廣大な天地が開けた——といふその天地は主觀的完成の、それ故に制約されざる抽象空想の樂土である。そこに一切の肯定といふべきそれは人生の傍觀的觀照なるのである。そこに無熱情の飄逸情趣が養はる。

不可測の開展として人生に面接するならば、自分一個の救ひといふやうの實生活と切り離しての主觀的完成の無意義であることが味はれよう。發菩提心いかゞせんも人世の迷執のさながらに没入するなやみは、我を實社會にこめしめつゝ、內的絕對統一の希求にめざめしむるからして、自分一個の救ひと局分して求むる自我觀の迂廻から解放せしめてこのさながらに、同時に萬人の生を總攝する信念にみちびき入らしめよう。

完成の統一に達せざるこゝが人生であるからして、自分一個の救ひ、完成といふこゝは局分の靜止觀である。その境地に萬人が救はるゝと見るのは懈慢である。複雑無限の開展を構成の

世界に閉止せしめむとするものである。救ひ得ざる我、救はれざる無限生成の世界として苦み悶へのくこゝろにのみ、生の無碍感が光被せしめらるゝ。そこにのみ詩が生れる。

煩惱濁罪濁の無解決の無極の進展のうちにあつて、完成の心地を我と自得の微笑に耽るこゝは人生の享樂である。

自分一個を生かす——それは實社會的生活から抽象した自我の瞑想的無制約の完成である。それは國籍なき世界人の空想人格にのみ可能である。認識論的究極の普遍安當人といふやうの人形を構成するのである。

それ故に我らは自分一個を生かしたといふやうの聖者よりも、史的隨順の人、制約的無完成の現實人をなつかしむ。さういふ人の情意的開展の特殊的具體的表現として、綜合的に國民史的生活を客觀的に示現する國民詩として、連作和歌を重要視するのである。

自分一個の救ひを求め、求め得たと思ふ人は社會的史的生活から飛び離れた特殊の生活を完成するのである。

足ひきの山たちかくす白くもはうきよをへたつせきにてこそあれ

かくして社會的制約のうちには悶着する情意的動亂から遠離せむとするのである。それらの悶へをうちにたゞへあはれむよりも外からしてあはれみながむるのである。そこに人生の「時」は客觀的に史的に開展示現せしめられずして主觀的に概括凝縮せしめらるゝのである。

我らの連作和歌は實生活のうちに於ての情意的動亂の瞬間を、具體的に表現するからして、それは綜合せられて無碍開展の生を内心に感得せしむる。國民的史的生活の制約に隨順する道德的觀念を無限の情緒的節奏に渾融せしむる。我らはそれを内的同朋感と呼ぶ。

それ故にわれらのうたは所謂藝術的空想の華やかさ、あはれさ、淋しさよりも實生活にいま悶ゆる實念、意力に表現の根據を求めむとする。

良寛の生活は、特殊の生活を完成しつゝそれを享樂した人である。

山かけの岩ねもりくる若みづのあるかなきかに世をわたるかな

かういふ生活は、我らの社會的苦闘の生活から見れば技巧的、裝飾圖案的生活である。

良寛は専門歌人のうたは嫌ひだといつたさうであるけれども、隱遁完成の生活に閉ぢこもつてゐたのだからして、彼は一般人間性に隨順する國民歌人ではなかつたといはねばならぬ。良

寛は史的生活を示現するところの詩人ではなかつた、無碍不可思議の生を味はむるしこばの示現者でなかつた。

良寛は萬葉を讚嘆したる傳へらるゝが、それはすなほな言葉こいふやうの外形の模倣に止まつてゐる。それはすなほな心こはいへやうが萬葉歌人の原始的な、高古な、熱烈な精神、日本精神の傳承者ではない。然し萬葉歌人にも色々あるからして家持位には追従し得らるゝだらう。

さす竹の君がすゝむるうま酒にわれゑひにけりそのうま酒に

よしあしのなにはのここはさもあらはあれこもにつくさむ一つきの酒

そこには家持の讚酒歌に見ゆる反抗的精神的情趣からの飄逸趣味を窺ひ得るが、家持ほどの情熱は矢張り見出し得られぬ。

良寛のうたは情意に直接であるよりも、反省冥想によつて按排せられて居るここは三句切の多いここによつて證せらるゝ。

秋もやゝうらさひしくそなりにけるを筐にあめのそゝぐをきけは  
はた寒み秋もくれぬこ思ふかなこの頃たえてむしのねもなし

要するに良寛のうたは理智的解決の俳諧歌である。現實の世界史的開展は良寛の如き中古的隱遁聖者の冥想反省の世界を顧みる餘裕なき生を痛感せしむる。あまりにあはたしいからして少し餘裕の氣分も「無用の用」だなきいふこは避暑避寒休息娛樂の衛生思想を人生觀に適用せむとするものだ。

秋風にちりみだれたるはぎの花はらはぎをしきものにぞありける

たまほこのきりのかけみちすゞしさにわがたちにけりそのかけみちに

かういふ餘裕調は、疲勞した時に休息感を誘ふにはふさはしいが、無限の開展力を暗示し得ない。かう見て良寛のうたには、不可抗の生の威力を味はしむるこゝば、日本の生にいきよみがへらしむる詩人のこゝばを見出すこゝは出來ぬ。

以上の批判は北越の偉人として尊崇せらるゝ良寛に對して無理解の漫罵として見られやうが我らは偉人として卓越するよりも凡夫人として協力するこころの内的同朋感にのみ無上の歡喜をたしかめむこゝしつゝ、あるからして、良寛の如き個的超脱の完成生活者の前には跪拜しがたい。我らは飽までも煩惱濁の凡夫人現實人としての情意の動亂に順ぜむとするその表現としての連

作和歌を「人」の世の交響樂として内心にひびき廣がる史的世界に無碍不可思議のいのちを味はむとする。

## われらの宗教的見地より芭蕉を論じて

芭蕉は「諸法從本來常示寂滅相……一代の佛教この外になし」といつたこゝが傳へられて居るがかういふ味識をのみ宗教的的信念と名づけるならば芭蕉の宗教的見地はありふれたつまらぬものこゝへよう。

然しこれ程のこゝが芭蕉をこりまいて居た弟子共にはありがたく思はれたこゝ見えて、芭蕉が火災の難をあやふく免れた際に猶如火宅の理りを懇に説示されたこゝいふやうの事、又丈草と芭蕉との俳談に侍してゐた正秀が譯が分らなかつたので丈草に尋ねた所、丈草は、我が翁に問ふ所は言語の俳諧にあらず、禪の俳諧なり、芭蕉翁はだるまなるはなきをこかされて引込んだなきいふ事が勿體らしく傳へられてゐる。

われら宗教的見地より芭蕉を論じて

そんなことはあつたらうけれども、今我らが味ふ意義からして芭蕉の宗教的信念を味ふについては、無論問題にするに足らぬつまらぬことだ。

今我らは何を宗教といはうか。ことば即ち國語によつて我らに傳へられ味はるゝ内的同朋感がそれだといはう。國語の威嚴にめざむることばが宗教的信念だといはう。

我國はてにをは第一の國なり。俳諧は萬葉集のことろなり、されば天子より下士民まで味ふ道なり、唐明すべて中華の豪傑に愧ることなし、こゝろいやしきを耻す——こいつて國語の威嚴にめざめたところに、正しく芭蕉の宗教的信念をたしかめ得るのである。

俳諧を中人以下の物を見るは、平語を俗談のみ覺ゆるなり、平語俗話を正さんが爲なり、つたなきことをのみいふを俳諧といふことあさましきことなり——

現用のことば、國語を日常行爲の説明語として見るのではなく、それを我らの生の表現として唯一自然のことばとして純化することが俳諧だといふのである。國語の威嚴、それをことばの純化、藝術的表現と味つた芭蕉は、我らの味ふことの宗教の傳承的示現者であつた。

國語の威嚴にめざむることは、民族的史的威嚴にめざむることであり、それは我らの生の綜

合的自覺である。こゝに我らをして世界文化のうちに獨立の地歩を占めしめて、その綜合的開展に隨順せしむる、この外に名づくべき宗教的信念はない。

てにをはこゝにいふは、生に密着することばの理論的節奏も味ひ得よう。單語にみつむる幻覺でなく、そをありのまゝに、すなほに脈絡せしむる、そは生の統一純化によつてのみなさるゝ。

唐明すべて中華の豪傑といふを今、すべて世界の豪傑に愧るなき彼らの生の威嚴にめざむることば、國語熱愛の精神といふことばの外にない。藝術的表現はその具現である。まことこの詩人はそれ故に民族的精神の表現者である。生の無極の開展に隨順する悲苦忍從の使徒であらねばならぬ。こゝにそのことばは外的階次を撤せしめて内的同朋の歡喜にみちびき入らしむる。

予も何時よりか片雲の風に誘はれて漂泊の思止まず——こゝいふ漂泊の心は、我らの國族移動の悲劇的精神の傳承的示現である意味はれよう。而かも徳川時代の靜止壓抑の世界にあつてその心は、奥州のつほの碑に對して「疑ひなき千歳の紀念今眼前に古人の心を閱す行脚の一徳存命の悦び羈旅の勞を忘れて涙落つるばかりなり」といふ史的回顧の情意の充實にその生命を持続したのである。



行脚掟に——山川舊蹟したしく尋ね入るべし、あらたに私の名をつくるこころなかれ——といつて、こゝに常示寂滅相的靜止の自然は郷土的史的民族的情意の感激のうちに活躍せしめられた。この情意的緊張は富士川の邊の捨子に、越後の宿の遊女に、悲苦不可測の人生を偲ばしめたのである。

芭蕉の奥州紀行は數あるものゝうちに最も生命のこもつたこころばが示されてある。道程の遙なるこころ、また險難なるこころ、風物の陰慘であるこころの豫想は、先づ肉體的勞苦こそその生命にまでも「定めなき頼みの末をかけしむる程の不安を感じつゝ、而かも漂泊の心は「そゞろ神の物につきて心狂」はしむる緊張を感じた、それは回顧せられざる文化に、人生の悲劇的記念に對して史的情意を興奮せしめたのである。

今それを暫く、更科紀行のうちの言葉と對比して味つて見よう。

木の下闇茂りあひて夜行くが如し雲端につらなる心地して篠の中蹈み分く……こいふやうの緊迫した生其まゝのこころばは更科紀行には見るこころが出来ぬ。

四十八曲ミかや九折重なりて雲路にたぎる心地せらる。……是等の弛緩したこころばは「さら

しなの里姥捨山の月見ん事しきりにすゝむる秋風の心に吹きわきて」こいふやうの局分の目的におく享樂的情趣に出發してゐるからである。

飯塚の宿を病をつめて旅立つたときの「斯る病覺束なしミ雖羈旅邊土の行脚捨身無常の觀念道路に死なん是天の命なりミ氣力聊取直し」こいふこころばには、生命の悲喜をかみしめつゝ、進みゆく無目的情意の緊張を偲ばしむる。

自然はそれにむかふものゝ情意の緊張にのみそのかたち、威力を示す。自然のかたちはこゝに情意のリズムと伴つて底ひなき生の動亂を表象する。

わせの香や分入右は有磯海

一夜の宿貸すものあるまじこいひをさされたよりなき寂しさ、こゝに海のひゞきは漂泊の情緒にその無限のリズムを諧調せしめた。

更に更科紀行を見るこゝ「彼の連たる奴僕ら恐るゝ氣色見えす……佛の御心に衆生の浮生を見給ふもかゝる事にやミ無常迅速のいそがはしさも我身にかへり見られて阿波の鳴門は波風もなかりけり」こいふやうに生死について傍觀的感傷を示しそこに舊套の概念を模倣するに止まり

われらの宗教的見地より芭蕉を論じて

つゝそのこゝばは修驗的弛緩に墮して居る。

然しすぐれたものもありまたかういふつまらぬものもあるこゝばがむしろ芭蕉の人生を示して居るこゝばへよう。芭蕉が「人」にして生きて居たこゝばが示されて居らう。芭蕉がまこゝの宗教をもつて居たこゝばが示されて居らう。それを示したものはこゝばであつた。それを味はしむるものはこゝばである。

動亂に順するこゝばはその時の生の眞實を示しつゝ、そのまゝに開展せしめこゝに全體としての生の綜合的に示現する。そのこゝばは國語である。その純化としての藝術的表現である。それ故に藝術的表現は史的生活の具體化であるといはるゝ。生を示すものはこゝばである、悠久なるものはこゝばである。

芭蕉が諸法從本來常示寂滅相といふ語を味つたこゝばならば、その「示」こゝばに力を會得したであらう。「便りなき風雲に身をせむる」漂泊の心、「花鳥に情を勞する」執着纏綿の情意カミのうちに示された自然のすがたに悠久寂滅の威力を感受しつゝ、それをこゝばに示し傳へた芭蕉は、我らの味はしめられつゝある宗教的信念に遊化した「人」であつたこゝばを思ふ。

更に芭蕉の自然觀が郷土的史的民族的感激の情意の緊張によつて人生に交錯綜合せしめられたるが故に悠久の生命を今我らが感受し得るこゝばを思ふこゝば、こゝば、國語、その純化としての藝術的表現の最後の統御力支持力は不可思議の生に歸命するが故の國家無窮の生の味識憶念にあるべきを信知せしめらるゝ。

不立文字こゝばは既に文字である。拈華微笑こゝば一つのこゝばである。さういつてこゝば、國語を無視するこゝばは、單語に無限の開展たる生を閉止するからして無示相の虛無觀に低徊し固着せざるを得ぬ。禪宗の人なごも、無内容の説教につまらぬ道歌なごを引用して容易なる概念的補足せしめつゝあるが彼等は先づ現用國語を読み得る限りの我らに味ひ得るその純化としての藝術的表現なる和歌俳句の修練によつて國語の生命にめざめねばならぬ。こゝばあけせぬ日本道は國語熱愛の精神に護持養育せらるゝ信知せねばならぬ。それが我らの宗教的信念である。

## 倉田百三氏の「布施太子の入山」

倉田氏の「布施太子の入山」はドラマの形式を借りた氏の告白を見るべきものであらう。さう見てそれを藝術的見地に於てよりも思想的見地から少しその言葉を分析して見よう。しかしそれは自然藝術的價值批判にもなる。

一二の批評にそれが説教であるを見て居るがそれは當つて居らう。それが説教であり即ち説明であるを見るゝところにその藝術的價值は大體に決定されて居らう。「俺は説教者としての使命を感じる」こゝにはせて居る通りに全部が説教である。説教は藝術ではないこゝへばそれで充分であらう。

釋迦如來かくれましうて

二千餘年になりたまふ

正像の二時おはりにき

如來の遺弟悲泣せよ

末法五濁の有情の

行證かなはぬききなれば

釋迦の遺教こゝに

龍宮にいらたまひにき

かく親鸞を悲歎せしめ「説教者としての使命」こゝを擲たしめたのは七百年以前であつた。其間に印度は英國の領土となり日本は東亞唯一の獨立國として開展して來た。近頃は印度民族の獨立運動の騷擾が傳へられて居る。それは日露戦役後印度民族の自覺を促して來てから引つゞく暗流であつた。その自覺を否むべくもない。

印度民族として釋尊の遺法を世界人類の爲に光被せしめやうとするならば先づ印度國民として獨立せねばならぬ。それには「一人出家九族生於天」こゝに個人主義的見地に満足して居つては不可能事たるべきだ。その「一人」を全民族生活に没せしむる團體主義的見地に覺醒せねばならぬのである。

涅槃の意義はこゝに轉換されねばならぬ。斷煩惱でなく不斷煩惱といはるゝのである。煩惱はこゝに不斷の史的生活である。即ちそこに得涅槃といはるゝのは人類史的生活を攝取する藝術的歡喜に名づけらるゝのであるが、人類史的生活の立脚地は國民的民族的な生活である。こゝは他は即ち自を待つていはるゝ如く自明のこゝである。またそれは全一生命の分析的見地からの爲であるに過ぎぬのである。

「一番慧く、一番末通りて愛したのだぞ」と思ひ昂るよりも「ひこしく愚に、愛するこか愛せぬこかはからひ得ぬもの」と痛感するところに「娑婆世界にいたる程護念せらる」と味はるゝのである。

かういつたのみでは自分一人の内感に過ぎぬのであるがその内容を客觀化するのには先にいふ史的生活である。

史的生活は無限に開展するのであるからして無論自分にしてその無限性のうちにある。その無限性は道德的價值としての善惡の複雑開展を内容せしむるのである。心理的は道德的價值を無限に聯繫せしむる洞察であつて即ち史的價值としてそれを總攝せしむるこゝである。

こゝに心理的藝術的、瞑想的道學的が對照せしめられよう。更にこゝから概括するならば藝術は史的精神の所産である。更に心理的は史的精神として綜合さるゝのである。

心理的洞察に於て優秀の藝術を示した岩野泡鳴の日本主義はその心理的洞察力から綜合された人生觀であつた。

心理隨順は心理洞察でありそこにありのまゝを攝取するのである。こゝに生の無限の開展は暗示されて歴史精神として統一さるゝのである。

ぬかるみのうちに夜光の珠をこ叫んだドストエフスキーの心理洞察には史的精神の統一力をみこめ得るのである。

概括していふならばまことの藝術家は自然として祖國隨順者である。史的悠久の精神のみこの濁亂のそのまゝの生に解脱を與ふるのである。「祖國よ、父母よ、汝等をこの世界の誰よりも一番深く愛したのだぞ、俺は汝等を悉く救ひ出さずには置かないぞ、天に生れしめずには置かぬぞ」といふ、そんな簡単な人生ではない。祖國は救ふべき對象ではない。われらのこゝに救はるゝ全體に名づくるのである。

更にいふならば解脱はたゞに内心の解決である。無對象の全體である。愛するもの、愛せらるゝもの、救ふもの、救はるゝものといふ如くに對立する能はざる渾融の、全一世界である。倉田氏の心情はよく想察さるゝのである。それは救はざるに眞に救ふに感ずるゝことであらう。それならば、それ故に、それは心理隨順の故の攝取不捨心にのみ名づけらるゝ。それは「一刻も早く檀特山」へでなく即刻の現實人生への没入であらねばならぬ。それはたゞ一念極促の歡喜であるのみである。

印度民族を救ふものは印度人として現實の事實にめざむることの外にあり得ぬ。それは地上の現實、印度國家の復興の外にあり得ぬ。「天に生れしむる」ものでなく「地」に生れしむることであらねばならぬ。「不滅の國」よりも無常動亂の國家を現實に痛感せしむることであらねばならぬ。さう感じて居らう、印度民族はいま――。

滅ミ不滅ミそれを現實の表裏進展に痛感せしめよ、滅の外に不滅を求むるもの、それは必竟斷滅の道である。對照對比の進展、それを全一ミ感激せしむるべきこの時は悠久に開展する。

無常動亂に隨順することは即ち無爲涅槃であり、その外に眺むるものは有爲涅槃ミ名づけら

るゝのである。「有爲涅槃は無常なり、常樂我淨は無爲涅槃なり」ミいふを翻轉交錯せしむる威力に、全一の涅槃は味はるゝ。

## 横濱港に渡米の友を送りて

「忽然念起名けて無明ミなす、」それは全官覺的渾融の現實界であらう。それはあざやかな對象の全統一現實世界であらう。それは不可思議全體の不可思議世界であらう。

箱根路をわがこえくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ

無限の波動は冥想のいこまなき現實に全官覺を集注せしむるのである。

それは科學的藝術的精神の情意的統御力である。科學的藝術的精神はまた史的精神である。史的精神ミは現實的開展的精神である。

忽然念起ミいふ直觀は生の威力であつた。それ故に大海の水の風に因りて波動するにミいふやうにその直觀世界の分析的光景は力づよく開展された。

横濱港に渡米の友を送りて

しかしながら水相風相は相捨離せずこいふ瞑想に官覺世界を閉止せしめたこゝは印度民族の不幸なる運命であつた。

ミケランゼロの自由姿勢よりもヴィンチの官覺的緊張に感激せしめらるゝこゝはわれらの科學的藝術的精神の教令である。

それは詠嘆の低徊情趣に餘裕を與へざる官覺的緊張に没入せしめらるゝのである。

廣々無涯底の海原の光りに波に、われらはたゞ無限波動の戰闘的情意を感激せしめらるゝ。

それは官覺的没入の全不可思議世界である。

大海の磯もこゝろによするなみわれてくだけてさけてちるかも

それは移動的無解決悲劇的史的精神の表現であつた。

「今晚のみが日本の地の上に枕してやすむのです、祖國のいのち、祖國の力、同朋の生活、草木のさやぎ、胸につきひ來る種々相！ まこめもあへぬ情緒のゆらぎ！」（八、一二、一二夜）

## 『現世利益和讃』の現實詩的化觀

現世利益和讃は惡魔傳説の詩化であり淨化であつたこゝいま味はるゝ。

梵天帝釋、四大天王、無量の龍神、炎魔法王、五道の冥官、他化天の大魔王、天神地祇、それらは惡鬼神また善鬼神として概括されて「願力不思議の信心」の威力の前に想像的恐怖誘惑の魔力を失はしめられた。

史的無窮生活の憶念は誘惑混亂の現實世界に無碍批判の一線を區劃してそれらを綜攝し淨化する狭少の唯一白道である。それはそれらの魔力のあるまゝを統御する金剛微妙の威力である。惡鬼神を恐れしめ善鬼神をして守護せしむる實力的信念である。それはそれ故に内的絶對君臨である。

いま現世利益和讃の言葉の威力をしぬばしむる現實的機縁は「國際現勢に於ける日本」の地位である。即ちそれを現代に正しく翻譯せしむる情意的詩的原理力は、かなしく苦しきが故に生き

甲斐ありミ味ふ實内容的現實主義的精神である。

はてしなく眼にうつり心に浮びくるあらゆるものを呼びかけめざめしめたホイットマンの詩的精神の基づくミころの人生肯定の原理威力をしぬばしむるよミわが友の叫んだミを想ひ出す。

現世利益和讃に「南無阿彌陀佛をミなふれば」ミくりかへす原理憶念信順讚嘆のながきつよき呼吸はその現實肯定の統御威力、全感覺的威力をいまわれらの耳に、全身に、心に波うちひびくミ感ぜしむる。

願力不思議の信心は

大菩提心なりければ

天地にみてる惡鬼神

みなミミくおそるなり

それはまたうちにやすらはしむるすゞしきひびきをつたへる。生の全開展にしばらくも離れしめざる不可思議相續のやすらひをうちに感ぜしむる。

國際國民的生存の恐れなき疲倦するミなき勤勞の全情的統御威力をミに味はしめ確信せしめよ。

「祖國の爲に」ミ歸依憶念する現實隨順の國民的勤勞は綜合的生成の自然の實内容的威力ミして、たミへば大海の波のすきまなくた、へみちよする如く、不可抗威力ミして人類的世界的文化を究極成就せしめよう。

われらは世界文化に參與する絕對不二の機である、國語的生命感覺はわれらの絕對不二の教である。

## 鏡の御影鑑賞感想

大山郁夫氏は「民衆文化の世界へ」ミ題した長大な論文を中央公論に發表したがそれは「文化創造の圏内へ生氣潑瀾たる新分子を注入しなければならぬ、……そこへ民衆精神を導き入れる」ミである……一切の民衆をしてその創意を以て文化創造に參加せしめる」ミである、そ

れはブルジョア文化を打破して、その跡へ民衆文化を建設することである。この民衆文化の建設は新しき時代の奥底に潜んで居る不可抗の要求である」こいふやうなここの冗漫なる説明であつた。

一切の民衆はこゝに日本國民であらねばならぬ民衆文化は國民文化であらねばならぬ、こ氣附かぬ迂遠論であつた。

文化は文化單位の確信に綜合さるゝ世界文化であらねばならぬ。わが文化單位の確信なくして文化はひび得ぬのである。文化單位の確信は國語の生命の確信である。世界文化の創造に参加するこいふこゝは文化單位を確信する「文化批判」であらねばならぬ。

「生氣潑瀾たる新分子」こいふ如きを無内容の言葉に反省せしむる國語的批判がわれら日本國民の「創意」であらねばならぬ。何となればそれは漢語の概念的想像實體の破斥であるからである。また「創意」こいふについても日本の思想を窮盡するならばこゝに引いた一節の言葉の如きは甚だ無創意のものであるこゝが指摘さるべきである。

いまそれに對する指摘として反照せしむる爲に近く友よりめぐまれた「鏡の御影」の鑑賞に對

する感想をのべようと思ふ。

「彼は決して隱遁仙人の消極的生活をなして悟りすまして居つたやうの人格ではなかつた。『鏡の御影』として傳へらるゝ彼の肖像は、一瞬間も靜止せざる生命の躍動をその固定を破つた姿勢の上に表現して居る。彼は動亂の生活を生活したであらう」

親鸞の人格を表示再現した『鏡の御影』の筆者は日本繪畫史にその名の傳はらぬ、その意味に於て無名の信實の子袴殿こいふ一畫家の表現であるこいふ。しかしながらそれをわれらはいま肖像畫として世界的價值を主張し得べき「日本繪畫の代表作」であるこ認むるのである。

こゝに「われらをしていまそれを認識せしめたこいふこゝはわれらの時代の象徴である」、こいふ友の暗示的概括語を分析して見ようと思ふ。

われらの生の表現はそれを認識せしむべき威嚴的要求をもつて居るのであるが、それを認識し得べき生の緊張律動をまたねばならぬ。認識するこゝき創作的鑑賞的生命はこゝに唯一の生命に融合する。認識を要求するものゝ生を認識さるゝ生はこゝに不斷の史的生命を成就するのである。それはわれらに唯一の生命である。無窮の史的生命の渾融直觀としてわれらにめぐま



る、日本の生命である。認識せしめ、認識せしめらるゝこゝは生命の不可思議なる意志力である、「本願力」である。こゝにわれらは世界文化の進展に參與するわが文化單位を確信せしめらるゝのである。

いま『鏡の御影』の作者の表現的威嚴はわれらに感受せしめられた。「袴殿」いふわれらの祖先にいましたしく對面せしめられつゝある。唯一生命の光明界に不可思議相續の史的意志力をいたゞかしめられつゝある。

「個人人格を同胞的生活のうちに没入せしめた」親鸞の人格が無名の一作家によつて表示再現されたこゝいふこゝはまこゝに偶然の、また自然の機縁であつたこゝ感ぜしめらるゝ。

求めざる、それ故にそこに全的に純一に表現せられたる生はわれらの文化史の生命の不可侵犯的威嚴的要求であるこゝいふ感ぜしめらるゝ。

外來思想に對する無批判追従こゝまた迷惑混亂のうちにわれらの文化史の生命の君臨的統御意志力の流行を確信せしむるものはわれらがわれらの生の表現の威嚴的要求を感激せしめられつゝある史的事實である。われらこゝはこゝにわれらの祖先また同胞である。

民衆的精神こゝは内的平等歡喜であらねばならぬ。國際的生活の事實からしてそれは國民的同胞感であらねばならぬ。それはわれらに唯一の生命、史的不斷創造の生命、即ち日本の生命の信知であらねばならぬ。

その客觀的認識根據としての表現そのもの、生命の威嚴を認識する藝術的直觀はこゝに民衆的精神の原理的内容なるのである。

今は「民衆」の時代である。われらをして袴殿いふ一無名作家の表現の威嚴的要求を感激せしめつゝあるこゝは即ち「時代の一象徴」である。

信ずるこゝなほかたし、こゝいはるゝその信こゝはわれらにしたしきわれらの祖先のまたわれらの同胞の生の表現の威嚴的要求を感受するこゝであつた。それはまこゝにたやすき、即刻にめぐまるべき歡喜であつた。こゝにわれらは謝しがたき恩徳感激の實行的表示として「文化批判」にいそしまむこゝする。

日本の生命の信知はこゝに國民的批判力を確立せしむる。日本の生命を信知するが故の文化批判は民衆的精神の根本的表示である。それはまた攝化隨縁不可思議の史的意志力の流行であ

る。

かういつただけではこれらもまた分析すべき概括的暗示語となつて仕舞つた。

## 告白断片

親鸞の言葉はわれら日本人のこゝろを表現したものである。それはわれらの選ばしめられた唯一の言葉である。親鸞の言葉の絶対威厳性は即ちわれら日本人の絶対威厳性である。

生命は唯一全體的である。價値の選擇は唯一に極まるべきである。「たゞこのこゝろひびくつ」  
と親鸞はいふ。

○

われらの生死は無窮の時のうちに一瞬として儼存するに極めねばならぬ。餘裕を許さざる一瞬である。消えうせしめ得ざる一瞬である。無上絶対稀有尊嚴の一瞬である。

生はいまである、永久にいまである、ありのままのいまである。不安動亂のいまである、

何とも爲し得ざるいまである。たゞちにいまである。それだけである。

信樂に一念あり、一念は信樂開發時尅の極促を顯はし廣大難思の慶心を彰はす——と親鸞はいふ。

○

個人的生活の内容は全人類的生活である。それは不斷の進展のうちにある。不可測の未來につながるのである。全人類的生活は悠久無窮のものである。全人類的生活は即ち國民史的生活の内容である。國民史的生活は即ちいまわが感ずる生そのものである。それは分析することを得ざるいまわが現前の直観である、犯し得ざる威力である。不可思議力である。

煩惱熾盛の凡夫といふは、また常没流轉の凡夫といふは、全人類的生活の無窮の開展にめざめしめられての一瞬時に名づくる告白的内容である。

われらが日本人たるこゝろは無窮の人類史的生活のうちに於ての現前の稀有絶対不可思議事實であるこめざめねばならぬ。

○

「過去今生未來の一切のつみを善に轉じかへなすこいふなり。轉ずこいふは、つみをけしうしなはずして善になすなり」親鸞はいふ。

いまあさましき氣づけば過去に未來にそのあさましさのたちがたきを感じるのである。それを動亂無窮の生に統一するそれが「善」である。「つみ」は人生の分析的一時である。「善」は生の全開展的渾融の一瞬である。また「つみ」は人類的生活の實内容である。さう總攝するそれが「善」である。即ち「けしうしなはしめぬ」こいふが「善」である。「轉ず」こいふは史的價值化である。

「自力かなはで流轉せり」こいふは「つみをけしうしなはう」こいふのである。聯關的全開展を切りはなさうとする徒勞に名づくるのである。通俗平和論者の如きはその實例である。

○  
精神的こは創造的綜合こいはるゝのである。もこづくこころのものを攝取しつゝ、その上に常に不可測に開展するこいふのである。それは一つもけしうしなふこいふなき開展である。

意義なきものなきこいふが生である、「無義の義」親鸞はいつた。

○  
「無明煩惱われらがみにみちくして欲もおほく、いかりはらだち、そねみねたむこゝろおほくひまなくして臨終の一念にいたるまでこいふまらすきえすたえず」こいふこいふがわれらの人類的生活の痛感であらねばならぬ。

四國協商太平洋平和なこいふこいふがうそであるこいふがすでに定められたる國際的道德を守らしむる人生觀的原理である。誰もさう氣づいて居らう。

○  
一つの「つみ」はそれに對するものゝ「つみ」は切りはなして考へ得られぬこいふである。英米が横暴である、こいつてもそれは横暴を働かした方にもつみがあるこいふかへりみねばならぬ。即ちわが國民的思想生活の弛緩を反省警戒せしむべきである。

○  
濁亂の痛感はずちに生の意志力の總攝である。不融化に對する緊張は意志力の總攝によつて淨化さるゝ。

その意志はわれらにこつて「日本意志」である。われらが「日本意志」といふのはわれらにあらはる、「世界意志」である。無極動亂の人生に隨順する意志に名づくるのである。われには日本人であるといふことは世界人として生きむとする悲痛の告白である。

## 感想断片

われらが生命を感じしめらるゝものは思ひきはめた人の言葉か、またなにもしらぬ人々の心にそなはれるものかである。何が思ひきはめた人の言葉であるかは物を思ふそれ／＼の人にこつて初めはちがふかもしれないが、事にふれてなにもしらぬ人のこゝろにかへつた時におのづから一致せられて来る。それはおもひきはめた稀有の人の言葉の自然のちからにこゝでもいふより云ひやうもないものである。

それ故になにもしらぬ人のこゝろのもつ自然は思ひきはめた人の言葉によつてあらはされて居る、こしらねばならぬ。

「文字もしらぬ愚痴きはまりなき」といはるゝ人のこゝろには却つて物をしると思ふ人の思ひも及ばぬ自然の生命がそなはつて居るこおそれねばならぬ。

「浄土の正機は人等」といはれたこゝろもこゝろにしのばるゝのである。

またこゝろに考へねばならぬこゝろは稀有の言葉、思ひきはめた人の言葉は一應むつかしいものであるといふこゝろである。

自然にふれぬまた生命にふれぬものゝ言葉は一應分りやすいものである。さういふものを見てよく考へて何事か譯の分らぬものになるのがよく考へるこゝろの眞實である。さういふ眞實があれば一應見て分りにくいこおもはるゝ言葉の生命にふれ得るやうになるのである。

それはしかしむつかしく物を理論的に考へて居る間はだめであるが生死の問題といふやうの簡單のしかし身にせまつて来る問題、さうでなくとも、現實的に人の一生の間に必ずあるべき必死の問題にぶつかれば、それはすでに生命的のものであるからして、それについてそれまではむつかしいと思はせた言葉を單純に思ひさくらせる機縁となるのである。

なにもしらぬ人のこゝろにもさういふ場合には、むつかしい言葉をもつてあらはさねばなら

ぬやうの生命的解決がなされる、こころがあるのである。

さういふ人のこころはすでに人生を思ひきはめた人の言葉としてあらはされてゐる。こころもねばならぬのであるからしてその人がその言葉をしらすまたならの言葉にあらはさなくともそれはあらはし得ぬのであるけれども、それでよいのである。

さういふ人のこころをあらはしたものと意味はせるものが「よき人の仰せ」もいはる、のである。われらの言葉の藝術的表現はさういふ人のこころをあらはしたものと見らるゝものであらねばならぬのである。

こころにまた考へねばならぬことは「よき人の仰せ」はわれらに唯一つしかないものである。こころ、それ故に一應いかにもそれはむつかしくとも文字もしらぬ愚痴きはまりなき人のこころにひそしく通ふこころをあらはしたものであるといふこと、またその「仰せ」はその人一人のちからではなく、無数のなにもしらぬ人のこころがその土臺となつて居るといふことである。

なにもしらぬ人。今まではいつて來たのであるが、その「しる」は云ふことはこのはてしのない、うごいてやまぬこころの人生にはたやすくはいひ得ぬことである。むしろその意味では「な

にもしらぬ」こころが「しる」こころであらねばならぬのである。

それには一應にいはるゝ「なにもしらぬ人」の立派な行ひをするといふことを考へればよいのである。宇宙を思惟するなごいつても人間の道徳が守れぬやうの人の「しる」こころはそれこそ「なにもしらぬ」こころである。

まことに知りあらはすものはこころにもまたたゞ一人にましますしらねばならぬのである。われらの生くる間にあひ得るその「人」はまことに「一人」である。「生命」はたゞ一つのこころであるからである。

しかしまたある人から見てまた別に「一人」を見る「人」があらうからしてさういふつながりをおもひたゞして行くときに思想の歴史といふものが出来るのである。それはしかしその一つの「生命」を分析するこころであるのである。それはいまわがこころに「生命」をいたゞくこころの分析であるのである。

「弘誓」乗海は無量無邊最勝深妙不可説不可稱不可思議の至徳を成就したまへり。こころはるゝ。成就せられたりを感じいたゞくこころもすでに成就したまへるこころのものといいたゞかねば

ならぬのである。

手の付けられぬ、何ぞいつてよいかわからぬことを強ひて名づけられたそれは言葉である。われらにはいろいろのおもひがあるそのうちで誰にもゆきわたるおもひは唯一つしかないのである。

われら日本人にまつて日本をおもふこゝいはわれらの各々にひこしい唯一のものである。それはしかし「日本」をおもふこゝこになる考へ、それもはつきりさせずとも、心ある人から見てもさうなる考へはみな「日本」をおもふこゝこにこり入れらるゝのである。

妻が夫をおもひ、夫が妻をおもひ、親が子をおもひ子が親をおもふこゝいふやうのこゝこは、それ／＼にみな「日本」をおもふこゝこになるのである。さう思つての行ひは現實の自然秩序即ち國民的秩序を正すものであるからである。

「日本」はわれらに成就されたものである。成就されたりこゝ、感ずるこゝこは、成就しつゝのこゝこである。

再びいふならば、われらが「日本」をおもふこゝこはわが一人の考への力でなくさうおもはせらるゝ、即ちさうおもふやうに成就されて居るのである。

このつぴきならぬ、ゆきわたるおもひはまこゝこに無量無邊不可説不可稱のものであり、そこからしてわれらの道徳的行爲がみちびかるゝからしてまこゝこに至徳である。

なにもしらぬ人の立派な行ひはその人人にまつてまこゝこに不可説不可稱であらう。何ぞもいひあらはすこゝこが出来ずに、世にかくれて仕舞ふかもしれぬが、それは「見えざる力」になつてわれらの行ひを成就したまふこゝこのものである。それはたゞ「よき人の仰せ」になつてあまねくわれらに示さるゝこゝこすればよいのである。哲學上のまた宗教上のむづかしい理論はしらすこゝもさういふこゝこをしつて居る人の企て及ばぬこゝこをするまこゝこに「名もなき民」の行ひは「よき人の仰せ」の威力のうちにもつて世に示さるゝのである。

「現實日本」の現實的威力はまこゝこに「名もなき民」の説かず稱せざる行ひの成就したまへるこゝこのものである。それらを祖先とするわれら。また同じ時に生れていきのこるものゝ無量無邊の責務をおもつてわれらははげみすゝまねばならぬ。さういまいまめられつゝある。

## 「義なきを義にす」

○

最近に或る機縁があつて近角常觀師の講話を拜聴した。師は熱心に殆ど三時間に亘つて「義なきを義にす」の意味に就て體験的告白的説明をされた——「義なき」の方の「義」は苦しみ悩む心をさうかしようとする色々の考へである。それがさうしてもさうも出来ぬセツバつまつたさき、それを見て居るぞいふ廣大の心がある。氣づかせてもらふ、それが「義にす」ぞいふ方の「義」である——ぞいふ意味をくりかへして人生の卑近の實例を引いて説かれたのであつた。それからして親鸞に對する最近の思想を二つに分けて批判を下された——一つは親鸞をあたゝかい廣大な心をもつ人格に理想化して、自分もさういふ人格にならうとする一類の思想である。それは「義なき」ぞいふ方の「義」を忘れたものである。つまり自分の煩惱の手のつけさころのないことを痛感せぬものである。それと對するものは、煩惱の手のつけさころのないところ

だけを見て親鸞を墮落し切つた人間を見てしまふもので、それは「義にす」ぞいふ方の「義」を忘れたものである。さちらも結局「義なき」の「義」の方だけになる、即ち自分の勝手の考へに落ちついて居ることになる。それでは「義にす」ぞいふ方の「義」がないから「信仰」ぞいはれぬ——

師は特に名を指して指摘されたものではなかつたが、かう伺つて僕は第一類を西田天香氏、倉田百三氏、梅原眞隆氏に第二類をまづ曉島敏氏に思ひ合はせたのであつた。かういへばそれらの諸氏の思想に對して批判せねばならぬが、他方面で發表したものに譲つておく。

これらは親鸞に關する思想に就いてのみでなく一般の思想に就いてもかう分け得らるのである。それも今實例を引いて説明する暇もない。

○

われらが「かく信ずる」「それを正しいと信ずる」ぞいつてもそれは二二二の和は四であるぞいふやうに客觀的に誰もに納得せしめ得べきものではない。それ故にわれらが正しと信ずる見地からして他の説を誤謬とする點を分析批判することの外にわれらの「信」を傳へやうとする心を現すみちはない。それ以上その相手がそれをきくもきかぬも「めんくの御計ひなり」ぞいま

「義なきを義にす」

かすより外にみちもない。

○

廣大のこゝろを氣づくことを僕らは翻譯して史的精神といふのである。われらの心は實社會生活上いろいろに迷ひくるしむのである。さう氣づかぬこゝもあるが、氣づかぬなりに苦み惱みつゝあるのが人生である。さう氣ついて厭はしい煩はしいこゝも、思つて自分ひかりに極りをつけようと思すればまづ遁世するか死ぬかの外に道はあるまい。しかし遁世もいつてもさういふ關係は實社會があつてのこゝであるから遁世なきは成り立たぬのである。結局それならば死ぬかといふに自分は死んでも人は死なぬのであるからさういふ意味では死にきれるものではないのである。

それ故にさうしてもいきて居らねばならぬ。いきて居るこゝはさうにもかうにもしようのないまゝのこゝである。即ちそれがわれらの實人生でありそのつながりは即ち人生の歴史である。こゝに自分にわるいと思ふこゝを許さるゝいままもなく、流れてゆく、無限に流れて行く、さう氣づくこゝろを史的精神といはうするのである。そこにわづかにすべてが許さ

るゝやすらぎよるこびきが與へらるゝ。

○

くりかへしていへば、自分ひかりにわるいと思づくこゝはむろんよいこゝである。さう氣づかねば問題にならぬのであるがそれが自分ひかりに始末がつけられると思ふこゝは自分ひかりを無限の人生、即ち歴史生活からポツンと切りはなしての事である。こゝに始末のつけられぬといふこゝは無限の人生であるからであると思づくば、そのわるいと思ふこゝを自分にゆるすのでなくしてゆるさるゝこゝになる、さう氣づくこゝを史的精神といはうするのである。「煩惱を断ぜずして涅槃を得」こゝもそれは示されたのである。

こゝに不断煩惱といふを客觀的に見ての史的生活、得涅槃といふを、さう氣づく主觀、即ち史的精神を翻譯して見ようとおもふ。

なほくりかへしていへば、「断ぜずして」こゝはわざと断ぜぬのではなく「断ぜられぬ」痛感せしめられる心に、それは無限の人生であるからだと思づかしめる、そこに「涅槃」こゝいはるゝやすらぎよるこびきを得しむるについて「断ぜずして」こゝ始ていふのである。煩惱は断ぜられぬ



こ氣づくに涅槃を得しむ。こもよみなほしてもよいとおもふ。さう信知せしめられた結果が「断ぜずして」こなると思へばよいと思ふ。

○  
近角師は「られぬ」こいふ否定的の言葉を力説された。「られぬ」に對するものは「しめらるゝ」である。この Passive の心を不可稱不可説不可思議こいふのである。Active のものはわれらの感ずる事實である。人生においてそれは煩惱である。史的事實を統御するものは史的精神である。即ち不可説不可稱の内心の經驗である。

○  
「相手の心でなくこちらの心である」こ近角師はこかれた。それはまた「こちらの心ではなく相手の心であつた」こ氣づかしむるのである。それはこちらの心にならないものが相手にあり、相手にあるものがこちらにならないこいふのではないこいふのである。それが心理的研究の基礎である。即ち「こもにこれ凡夫」こいふここがそこに痛感せしめらるゝのである。「こもに」こいふここは「われひこり」こ思ふこころを破るからして、なやみあるまゝにやすらぎ得るのである。それ

は安心こいふよりも、むしろ不斷の不安心にこきはなす心である。

例へば米國を正義人道國、日本を軍國主義侵略主義こしてしまふのはこの人間心理の痛感がないからである。いまわれらが英米を警戒するこいふのは敵こ憎惡して見るのではなく「こもに凡夫」たるここの痛感に本づくのである。

○  
この痛感に相手はしめつゝこちらでは相手をゆるす心があるのである、そのゆるす心はわれらの争ふ心をもゆるすのである。即ちそれはゆるす心もなく争ふ心をゆるす心である。即ちそれは實行の生をおもふこころである。實行は不可思議創造こいはるゝのである。戦争はたこへば勝つか負けるかよいかわるいかを計量してのここではない、その計量を絶したる實行の不可思議に没入するのである。

近角師は師の體驗的苦悶統一の當時を追懷されて「その當時には今ざらにいふ煩悶こいふやうの便利の文字がなくてその苦悶をいひあらはす言葉に困つた」こもいはれた

内心の心理的經過に密着した言葉はそれ故に悠久の生命を傳へるのである。さういふ言葉は

「義なきを義とす」

稀有のものである。いま師がかくいはるゝので師の苦悶が全人類の苦悶であつたと思はるゝのである。

そこに「よき人の仰せ」にたしかにいはるゝのである。「よき人」は忍らい人、神聖なる人といふのでなく、よくわれらの心理に透徹した人、われらの苦むが如く苦み、われらの苦みの底をたゞいてまたわれらと共にくるしむ人、こもいはるべきである。「よき人」は即ち心理學者である。専門心理學者ではなく人生心理學者こもいはるべきものである。すなはちまたまここのモラリストであるこもいはるゝのである。

○

いま「義なきを義とす」「こいふここ」「不斷煩惱涅槃」「こいふここ」を考へ合はすれば「義なきを」「不斷煩惱」に「義とす」は「得涅槃」に相應するのである。それは結極生の史的相續開展の信知となるのである。

意識的過程のそれ／＼は獨立して存在するのではなくして全體として動く時々こ前後に對照せしめて名づくる心理的抽象であるこ見るヴントの心理原理論にも、それは相應するのである。

○

如來こは宇宙の情意的總稱である、個人的意志として對照抽象さるゝ全體意志の直觀に名づくるのである。

あらゆる情意的要素はわれに具はる故に他の心を推知し得るのであるからしてわれこおもふこゝろはたゞちに一切群生心海大心海こいはるゝのである。それ故にその開展に就て人類心理學的研究がなさるゝのである。

○

これらはわれらの國際國民的生活の原理であつて、こゝにわれらの文化史的傳統單位、國家的現實對抗單位を確認せしむるのである。

近角師はこの地上に極樂天國の出現を豫想するやうな馬鹿々々しいここは考へ及ばぬが、「こもに是凡夫」の痛感にみながめざめたならば、やむを得ざる情意的動亂を攝取しつゝ、世界的道徳的秩序は支持せられゆくであらうこ説かれたのであつた。

これが流行偽新親鸞思想のまた一般流行思想の批判の基準となるのである。

「義なきを義とす」

二三七

○

よしあしの文字をもしらぬひこはみな

まここのころなりけるを

善惡の字しりかほは

大そらごこのかたちなり

まここの無涯底動亂の人生である。安心は出来ぬこ安心せしむるこいはうか。世界的不安はまここの「善惡の字しりがほ」のすべての道德觀念を混亂せしめてしまつたのである。「まここのころ」こいはるゝ世界人類の心の「骨體に徹入」してそれを照しまるべきころを親鸞の最後に告白したこのここばに偲ばしめらるゝ。

○

いま、英米の世界支配意志をわれらが感ずるこいふ、それはわれらの國民史的生活威力の「しからしむる」ころのものである。

それは、われらの祖先の「ちかひ」にして、さう感ぜしめ、對抗せしむるのである。われらの

「はじめて」思ひ付いてさう感ずるのではない。それ故にわれら日本人にしてそれに對抗し生活せむとするのは「よからむこもあしからむ」こも願慮するいこまなきまゝの生である。まここのそれは自然不可抗の生である。

こゝに「はじめて」われらは生の情意的威力を自然に充實せしめらるゝのである。

それはわれらの祖先の「はからはせたまひて」われらにめぐみ與ふるころのこゝろである。われらの祖先の「ちかひ」こは「祖國日本」である。われらのあるがまゝの生活をそのまゝにをさめこり、すべさゝへてあますこころなきに仰がしむるみ名こしてわれらは「祖國日本」こいふのである。

この「しからしめらるゝ」につけておもひはからふこまなきにつけて、またさうしらしめらるゝにつけて「義なきを義こす」こいふのである。「義なき」こはさう感ずるにつけてわれらの營む國民生活であり、その總攝こして「義こす」こは「祖國日本」であるこいふのである。

○

「ちかひのやうは」そのまゝの人たらしめようこいふのである。「無上佛」こいふはこゝにきは

「義なきを義こす」

まる生存意義を感じる人、こいふこいである。「有上」のこころなき、即ちこころにいまきはめしむる平等のこころである。即ちそれは團體的不可思議の「こもにする」生活情意こもいふべきものである。「名もなき民」こもいはるゝのである。「日本人われら」こもおもふこころは祖先の子孫の「ちかひ」あはすべき心による生活情意である。それは國際的人類生活と離れざる、即ちそのうちにあるが故に分たしむる名であるからして「日本人われら」こは世界人類こもに無限に生活するこころである。

則ちわれこいふ名もこころも没せしめて、没せしむるが故に團體的悠久生命こしてあらはれいくるこいふのである。

○

無上涅槃こはこころに國民史的悠久生命である。それはまここに何こも名づくべき、それこさして示すべき形なきものである。しかしながら形なき生命をあらはすものは言葉である。

「かたちもなくまします」こもおもふこころをあらはすものは言葉である。即ちそれは「かたちもなくまします」生命の「かたち」である。

こころに「ちかひ」こはまたわれらの言葉である。「ちかひあはす」こころは言葉こして表現されて悠久に傳はりひろがるのである。

「この道理をこころえつるのちには」まここにたゞ生の悠久不可思議開展にまかせいき得よう。刻々の動亂に傾動しつゝもそれをまた自然のはからひこすべしめてやすらぎ得よう。

## 総合的親鸞研究跋

「……たゞ常に直接経験の上に、平凡なる現實の生活の上に、何かそれを意義あらしむるものはないかと思ひ苦しんでをりました。そこで生の矛盾なきを考へ、戒律によつての超絶の到達なきも考へましても、動く現實は致方ございませぬ。そこで結局、他力、聖人の信に歸着せねばならぬのでしたが、阿みだ佛の實在をいふところで常につまづきました。近角氏の歎異鈔講話なごよみまして時には涙を催したごともありますが、落附いて考へるご、やはりこの阿みだ佛の實在に突止ります。これを三井氏が人生だご開いて見せて下さつたので面白くなりましたが、然しそれはまだ理解に止りました。三井氏ごの直接の文通によつての感激がなかつたら恐らくまだ黑暗の闇にうろついてゐるごこゝに存じます。今でもまごこゝに薄明なものでございしますが、たゞこの感激の一念だけはまごこゝに自らには生きたもので、この心から聖人の御遺文を味はせて頂いて居ります。たゞそれだけでございします。」

これは私をはじめて本書の著者木村卯之氏より頂きました御手紙の一節であります。「人生の表現」誌上の印象をたよつて手紙を差上げましたところ、その御返事として大正四年三月九日附で右の御言葉に接したのです。その後御目にもかゝり、また不思議にもその翌年より四ヶ年間、氏の側近きところに移住するを得ましたので、かたぐい人生の表現社の人々とも御交際をねがふことが出来ました。

その間いろいろ自分の苦痛するところ、また考へるところが變化して居るのでありますが、氏より特に述べ承つたことは究極は右に掲げましたその一點に歸するのであります。そしてこの一點をまきひろけて主として三井甲之氏の文章を読みこなしていたとき、また親鸞聖人の著書のところ々々をその直接経験にてらして指示して頂きました。

ヴァントは「創造的综合」といひ、山鹿素行は「思ひは兼ねるにあり」といふ。親鸞はそれを「即ちいふことは願力を聞くによつて報土の真因決定する時刻の極促を光闡せるなり」と示したことを今こゝに思ひいづるのであります。

當時私は「人生の表現」の表現法に接しながら、なほ自分一人の研究をやらうと焦りました。

しかしかく焦れば焦るほど「総合」といひ「兼ねる」といはるゝところから遠ざかつてゆくのであります。

氏は私に對して何々の研究をするならばそれは三井甲之氏のきれ々の論文についてせよといつて下さいました。しかしかく推奨せられて繕いたものは、世間の範疇に入るべき研究ではなく、たゞ讀めば研究も何も忘れてしまつて、何のなしに言葉にひきつけられてしまふ。しかもそれは小説戯曲の如く讀んだあにいろいろ煩はしい印象のこるものではない、まことにそれは肯けばそれでよいものであるのに自分は願ひてまたも来た道もいふべき研究の成果や方法に屈托してをる。また親鸞聖人の文章は氏に讀んでいたゞくところは、自分が讀む時ご全くちがつて、まことに肩の荷が下りたように安らかに、また空腹のときの食物のように有難く味はれるのに、別なところを自分で見出さうとするたゞむつかしくなるのみでした。

當時私は一片の質疑をもせず低徊してをりましたが、たゞある時一人の新しき學友が自分のいふことを傾聴してくれ、何かそれが喜ばしいので親鸞の「よき人の仰せをかうふりて信ずる」ことは事實いかなるこゝであるかを氏に質問したこゝがあります。

それまでに度々矛盾を感じ居りました。ここは、この時の氏の御答によつて氷釋するここを得ました。氏は「今現によき人の言葉を自分に信受するように、それはあなたの言葉を信受されてゐるのである。それでよいのである」この意味を告げられました。

自分の力で偉大になり然る上に他人を心服せしめ得るのみ考へてゐた自分に今思ひがけない極促の歡喜が與へられたのである。まことにそれは直ちに畏るゝところなく肯かしむる人生歸命一瞬であつたのであります。

しかし私はこの一瞬より出で、またいろく迷つてをるのであります。

その間に友といふこと、祖國といふことが自然に明かになり、同信同證と異學異見との別れ目、また誤謬指摘といふこと、告白表現といふこと、それらが外にまた内について示され味はしめられて來たかと思ひます。

そしてまた社會の流行思潮が次第にわれらの實生活に入り亂れてゆくをおほえしめ、告白は批判となり、批判は信の告白である。氣づく如くあります。

最後に自分に最も印象ふかき親鸞の言葉を引用して、このあらげぶりのまゝの跋文を補足せ

しめよ！

「おりにしたがふて、まきぐもわがへこいふなり」(1)

「この信は最勝希有人、この信は妙好上々人なり」(2)

「五には人等なり淨土の正機なり」(3)

「かれこいふ。これこいふ。あふこいふ。あふこいふはかたちこいふころなり」(4)

「去こは釋迦佛なり。來こは彌陀なり」(5)

「思不思議いふは、思不思議の法は聖道八萬四千の諸善なり。不思議いふは淨土の教は不可思議の教法なり」(6)

「大涅槃(左訓に)——ひろし、かさね、かさね」(7)

「弓削の守屋の大連、邪見きはまりなきゆへに、よろづのものをすゝめんこ、やすくほこけこまふしけり」(8)

「よしあしの文字をもしらぬひこはみな、まことこのころなりけるを、善惡の字しりがほは、おほそらごこのかたちなり、是非しらす邪正もわかぬこの身なり。小慈小悲もなけれごも、名

利に人師をこのむなり」(9)

以上九つの文章は、いづれも氏と對座中、指摘または説明をうけてしるしをつけておいた箇所であります。その中(1)は或者が「死」といふことについて質問したとき示されたものであり、(2)は「信」といふ言葉に、また(3)は「人等」といはるゝところに重きを置かしむる。(4)は難値難遇といふこと、「よき人の仰せ」といひ、「わが身のれう」といふことの訓詁的證明と解すべきか。(5)は過去の威嚴と未來の攝取衆生力との對照。(6)は哲學打破。(7)は「その人から見ても別に一人と見る人がある」といふ史的生命の事實内容の形容と味ふべきか。(8)は思想的法則の不可思議。(9)は親鸞の最後の言葉としてかく全否定に終つて居るところに獨無等侶の生命を偲ばしめらるゝと承りました。今は祖先親鸞に指さるゝところを本書にしたしく聽くことを得るよろこびよ。あゝ

大正十一年十月十九日つゝしみてしるす

井上右近



大正十二年一月五日印 刷  
大正十二年一月八日發 行

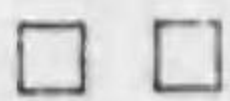
綜合的親鸞研究奥附  
定價 金壹圓五拾錢

著 者 木村卯之助

發行兼  
印刷者 京都市下珠數屋町  
東洞院西入橋町八番戸  
西村九郎右衛門

發行所 京都市下珠數屋町  
丁子屋書店

振替(東京)四五九七  
口座(大阪)一〇二九〇





504  
139

終